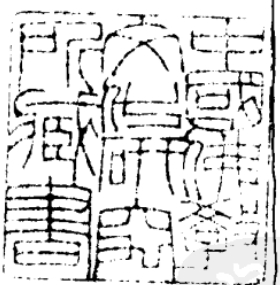
000366

弘法大師 空海全集

第三卷



筑摩書房

訳注者・解説者（五十音順）
遠藤祐純（えんどう ゆうじゅん）
大正大学助教授
金岡秀友（かなおか しゅうゆう）
東洋大学教授
福田亮成（ふくだ りょうせい）
大正大学専任講師
吉田宏哲（よしだ こうてつ）
大正大学教授
頼富本宏（よりとみ ほんこう）
種智院大学教授

弘法大師空海全集 第三巻
昭和五十九年三月十五日 初版第一刷発行
昭和六十一年九月一日 初版第三刷発行
編者 弘法大師空海全集編輯委員会
京都市東山区東山七条 総本山智積院内
真言宗智山派
宗祖弘法大師千百五十年御遠忌奉修局
代表 小沢照禧
編輯代表 宮坂宥勝
発行者 布川角左衛門
東京都千代田区神田小川町二ノ八
発行所 筑摩書房
郵便番号 一〇一―九一
電話 東京(291)七六五一(営業)
東京(294)六七一一(編集)
振替 東京 六―四一二三
印刷 株式会社精興社
製本 株式会社鈴木製本所
落丁・乱丁本はお取替致します
Printed in Japan ISBN 4-480-77003-8 C 0315

如是四解中間無量法門法門皆
相同等法相互相攝無礙無
二相四種之說之悅無相無為
法中畢竟空相之妙法門
門等法名為菩薩無生忍菩
薩之菩提也為菩提門論之所
說門繼此之後下文門說一

毗盧遮那成佛神加持者 梵音毗盧遮那者日之別名即除暗遍明之義也 然日之光不可為喻但取其少分相似故加以大名曰摩訶毗盧遮那也
成佛者具足梵音應云成三菩提 是正覺正知義 謂如實覺知過去未來現在
眾生數非眾生數有為無為等一切諸法皆了了覺知故名為覺 而佛
即是覺者故就省文但云成佛也 神變加持者舊譯或云神力所持或云
佛所護念 於此自證三菩提出過一切心地 現覺諸法本初不生之處 言
語盡竟心行亦寂 即事而真無有終盡 故曰神力加持 經者梵本
具題云大廣博經因陀羅王 王者帝釋也 言此經是一切如來秘要之
藏 於大乘眾教中德特尊 猶如千目為釋天之主 今從題太廣故不
具存 入真言門住心品者 梵具有二號 初云修真言行品 次云入真言門
住心品 謂入住之義以兼修行故雜於文 但著其一 真言梵曰曼
怛攞 即是真語如語不妄不異之言 龍樹釋論謂之秘號 舊譯云
咒非正翻也 梵云薩路也 此翻為諦 諦謂如諸法真相而知 不倒不謬 如說
日可令冷月可令熱 佛語不可令異 集真是因 集是因 滅是果
是即是真語之義也 文殊所問經大集陀羅尼自在王品谷釋慈雲字母与此經所說其義
伴吒 阿半 鉢多 也
悉地是真言妙果 成就者是作業成就
菩提身者二名到而有自在神力 一切三業身
金剛手者持金剛 義得深淺二釋 其義為勝 如真陀羅尼之寶之王
為度三十二身力不如一香象力 又如一閻浮提丈夫之力
牛糞種類由此有波羅門種令此母子乃是遺法
等梵音 涉也地 提縛多
切韻云 大日經疏第十二云字者梵音阿剎羅即是不生義
薩縛達磨一切法也
阿僳若名為意樂處 謂寂行者所樂之處或獨一無侶 或二三人於寺外造限量小舍
復次一一字門皆言不可得者為明中道義故 一切顛者是云薩縛轉奢
奈耶伽是龍樹花 云龍花者是龍中所尚之花 涅槃伽是此方薄鎰
白檀香西方名為摩羅耶是山名 即智論中云除摩梨山更無出旃檀處
摩訶南底是大寂義 蘇多是逝義 南底摩羅是作寂義
次云鉢囉睒摩達磨唱若多者 鉢囉是最勝義 睒摩是證此寂
達磨是法 唱若多是生

凡　例

一　本巻には、『大日経』『金剛頂経』『理趣経』『実相般若経』『仁王般若経』『法華経』『梵網経』『金光明最勝王経』『金剛般若経』『大日経疏』『釈摩訶衍論』および「一切経」に関する「開題」類、ならびに経文についての注釈もしくは抜き書きの類を収めた。

一　本文は二段組みとし、上段に訓み下し文、下段に現代口語訳を掲げ、各篇の末尾にそれぞれの注記を収めた。

一　訓み下し文、現代語訳、訳注の作成にあたっては、長谷宝秀編『弘法大師全集』（増補第三版）を底本とした。

一　各篇の構成を分かりやすくする目的で、適宜、本文の内容を分科し、区切りごとに一行あけとした。

〔訓み下し文〕

一　訓読は原則として前記『弘法大師全集』に付された訓みに従ったが、訳者独自の判断によって、訓みを改めたところもある。また、他本によって文の一部を補ったところもある（当該箇所の注記に示した）。

一　訓み下し文は、内容に従って適宜改行をほどこし、句読点・並列点（・）を入れて読みやすくした。また、底本で二行割書きとなっている箇所は、〈　〉を付して小活字で一行に組んだ。

一　漢文の助字、もしくは副詞・代名詞・接続詞その他に相当する漢字の多くを仮名書きに改めた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

（例）夫若是此之其以云曰言謂即則乃又亦復有無所不非也

ただし、とくに意味を考えてそのままとした場合もある。

一　底本に使用されている古字・略字・俗字などの異体字は、おおむね正字体、もしくは現行の字体に改めた。

（例）漫荼羅・曼荼羅→曼荼羅　陁→陀　最→最　虚→虚　職→職　皷→鼓　躭→耽　導→碍

弃→棄　躰→体　刼→劫　虵→蛇　決→決　減→減

なお、あえて通行の字体に改めなかったものもある。

（例）辯・辨（弁）　龍（竜）　廻（回）　燈（灯）　毗（毘）　慧（恵）　癡（痴）　雙（双）

一　訓み下し文のみ、仮名遣いをすべて歴史的仮名遣いとし、難読語、仏教独自の読み方をする言葉をはじめ、漢字にはできるだけ多くのふり仮名をほどこした。

一　経論などの書名には『　』を、引用文に相当する個所には「　」を付した。

〔口語訳〕

一　下段に掲げた口語訳は、上段の訓み下し文と対照しつつ読むことができるよう、できるだけ原文に忠実に、かつ平易な訳をむねとした。

一　訳文中の（　）は、文意をとりやすくするため、原文にない語句を訳者が補ったことを示し、小さな〔　〕は、原文に出てくる術語を補って、上の訳語との関係を明らかにしたものである。また小さな（　）で挿入したものは、上の術語に対する簡略な説明である。

〔訳　注〕

一　仏教の専門的な術語や難解な語句には、訓み下し文に指示番号を付して、各篇ごとの末尾に一括して注記を掲げた。

一　とくに真言密教の術語の詳しい解説を「補注」として、本全集の第一巻末尾に掲げてあるので、併せて参照されたい。

一　本文中の経論などの引用箇所の出典については、注記に『大正新脩大蔵経』の該当する巻数・頁数・上、中、下段の別を、（大正三二・一八九上）のように表示した。

一　本文に出てくる経典名や真言を表記する梵字（梵語）は、注記にその原語の音を片仮名書きとローマ字で示し、真言は必要に応じて一部にその和訳を掲げた。

本巻の訓み下し文、口語訳、訳注の作成に際し、全体を通じての訳文の体裁、訳語、注記などの若干の調整を宮坂宥勝が担当した。

目

次

凡　例……v
大日経開題（法界浄心）……吉田宏哲 訳注……三
大日経開題（衆生狂迷）……吉田宏哲 訳注……二七
大日経略開題（今釈此経）……吉田宏哲 訳注……四七
大日経開題（大毗盧遮那）……吉田宏哲 訳注……六三
大日経開題（隆崇頂不見）……吉田宏哲 訳注……九六
大日経開題（三密法輪）……吉田宏哲 訳注……一〇七
大日経開題（関以受自楽）……吉田宏哲 訳注……一二三
金剛頂経開題……遠藤祐純 訳注……一三七
教王経開題……遠藤祐純 訳注……一八七
理趣経開題（弟子帰命）……福田亮成 訳注……二一

理趣経開題（生死之河）……福田亮成 訳注……三二
理趣経開題（将釈此経三門分別）……福田亮成 訳注……二三五
真実経文句……福田亮成 訳注……二四一
実相般若経答釈……福田亮成 訳注……二七一
仁王経開題……福田亮成 訳注……二八三
法華経開題（開示茲大乗経）……頼富本宏 訳注……二九五
法華経開題（重円性海）……頼富本宏 訳注……三二七
法華経開題（殑河女人）……頼富本宏 訳注……三五九
法華経釈……頼富本宏 訳注……三九七
法華経密号……頼富本宏 訳注……四二五
梵網経開題……金岡秀友 訳注……四三五
宝勝王経開題……金岡秀友 訳注……四六三

金勝王経秘密伽陀……金岡秀友 訳注……四三五
金剛般若波羅蜜経開題……遠藤祐純 訳注……四九七
一切経開題……吉田宏哲 訳注……五三五
大毗盧遮那成仏経疏文次第……吉田宏哲 訳注……五四一
大日経疏要文記……吉田宏哲 訳注……五六五
釈論指事……吉田宏哲 訳注……六二七
解説……六七一

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

第三卷　思想篇三

大日経開題（法界浄心）

吉田宏哲訳注

大日経開題（法界浄心）

*[一]それ法界[二]の浄心は、十地[三]を超えて、もつて絶絶たり。[四]一如の本覚は、[五]三身を孕んで離離たり。況んやまた曼荼[六]の性仏は、[七]円円のまたの円。[八]大我の真言は、本有のまたの本なり。風[九]水の龍、その波瀾を動ずることを得ず。[一〇]業転の霧、その赫日を蔽ふこと能はず。[一一]「恒沙[一二]の眷属は、鎮[一三]に自心の宮に住し、無尽の荘厳[一四]は、本初の殿に優遊す。然れども輪王の性、金剛[一五]の種にあらずんば、誰かよく三密[一六]の曼荼を見、四印[一七]の神秘を聞かん」。

[一八]いはゆる『大毗盧遮那成仏神変加持経』とは、これすなはち諸仏の大秘・衆

そもそも真理の世界の浄らかな心は、十地（聖位の菩薩）を超えてとびはなれてすぐれており、唯一さながらの本然の覚りは、三身（法身・報身・応身）を保持してしかも（世間から）徹底的に離れている。ましてやまた曼荼羅を本質とする仏は、まどかに満ちみちて完全に円満である。真理の大いなる自由なはたらきを説く真実の言葉は、本源的な存在のそのまた本源である。風と水とを呼ぶ龍もその波を起こして（真理の）水を飛び散らせることができず、生命あるものの行為がうず巻いて起こす霧もその（大日如来の）輝く太陽を隠すことができない。ガンジス河の砂の数に等しい（仏の）親族は、静まりかえって自心の宮殿に住し、限りない数の厳かな荘りは、本初から存在する宮殿に美しく飾られている。

しかしながら、転輪聖王の種性、金剛の種族でなければ、だれがよく三つの秘密がまどかにそなわっている曼荼羅を見ることができようか。四つの真理のしるしの神秘を聞くことができようか。

生の極妙なり。[一九]報応の諸仏は秘して談ぜず。[二〇]変化の如去は黙して而も答せず。[二一]補処の大士はその一人をも識らず。[二二]飲光の薩埵は彼の逗留を聞かず。[二三]法界宮の中に秘主寂を扣きしの日、[二四]自在殿の内に密王庫を開きしの朝の如きに至つては、[二五]心殿を発いて珍財を示し、[二六]重関を除いて、もつて自楽を受く。[二七]三等の理、彼此異なることなく、[二八]五智の覚、人我同じく得たり。[二九]座を起たずして金剛すなはちこれ我が心なり、[三〇]三劫を経ずして法身すなはちこれ我が身なり。[三一]三部の諸尊は宛然として而も具し、[三二]三妄の衆障は忽爾として現ぜず。[三三]無量の福智は求めざるに自ら備はり、無辺の通力は営まざるに本より得たり。[三四]跛驢、滅没の迹に比ぶることを得ず、[三五]疲車、誰かよく神通の行に角べん。[三六]経の大意、教の大綱、蓋しかくの如し。*

いわゆる『大毘盧遮那成仏神変加持経』とは、これはすなわちもろもろの仏の大いなる秘密であり、生けるものにとってのこの上なくすぐれてたくみなはたらきである。修行の果報を受け楽しんでいる仏、他に応じてこの世に現われる仏は（大日如来の境界を）ひそかにかくして語ることがない。かりに姿を変えて現われた仏は沈黙して答えない。つぎの世に仏になることを約束された偉大な修行者は、その一人として（この大日如来の世界を）知らない。（仏弟子の）大迦葉はかの（大日）如来がご滞在になっていることを聞いていない。

真理の世界の宮殿の中で秘密の主体（である金剛杵を手にする者）が、（大日如来の）沈黙を破っ（て質問をし）た日、自由自在な宮殿の中で秘密の王（である大日如来）がその宝の庫を開かれたその時は、心の宮殿を解放して素晴しい財宝を示し、重いかんぬきを抜いて（財宝を）自ら受け楽しむ。（身体と言葉と意との）三つが平等であるという真理は、仏も人びとも異なることはなく、五つの智慧を得ている仏の境地をわれも同様に得ているのである。

この場所を動かないでさとっている場所がすなわちこの自分の心であり、無限の時間を経過しないでも真理の身体であるのはすなわちこの自分の身体である。（仏と蓮華と金剛という）三つの部門のもろもろの崇

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com